

特集 「2014年度人工知能学会全国大会(第28回)」

特別講演・招待講演

犬塚 信博(名古屋工業大学), 鈴木 麗璽(名古屋大学)

2014年度は人工知能学会フェローであり, 本学会設立当初から活躍されてきた慶應義塾大学名誉教授・嘉悦大学大学院ビジネス創造研究科教授の古川康一氏による特別講演と, 若くして今回の開催地松山でサイボウズ(株)を創業され代表取締役として活躍中の青野義久氏, また大会をお世話いただいた愛媛大学工学部の吉井稔雄教授から招待講演をいただいた。

サイボウズ代表取締役の青野氏の招待講演「情報共有の新しいトレンド」は大会2日目5月13日に行われた。IT技術がサポートしていく新しいワークスタイル, チームで仕事をしていくための考え方を講演いただいた。司会は山口高平会長である。山口会長と青野氏は先輩後輩の間柄とのことで和やかな雰囲気の中で講演が進められた。青野氏はグループウェアの開発に取り組み, チームワークにこだわっての技術開発の経験から, 情報共有について示唆に富む話題を提供していただいた。これまでの取組みをご紹介いただいた後, チームワークの心理学や行動学に立ち返って, チームでの仕事についてモデル化が検討され, ここから情報共有としての必要要件が解き明かされた。後半はさまざまな業種での情報共有の実例についてそれぞれの側面を説明いただいた。興味深い話題や動画を用いた巧みなお話しように加え, 演台を背にしてステージに進み出る, 会場を巻き込むお話しように大会の前半を熱くする講演であった。

大会3日目5月14日の嘉悦大学教授の古川康一氏の特別講演は松原 仁副会長(現在会長)の司会進行のもとで, 「第五世代コンピュータからスキルサイエンスへ—論理プログラミング・アプローチ—」と題して行われた。始めに, 第五世代コンピュータプロジェクト(FGCS)における技術開発の歴史として, ご自身による Prolog を用いたルービックキューブの解法の開発に始まり, LISP を主とするアメリカの専門家達との論争(湖-ファイゲンバウム論争), ハードとソフトをつなぐ並行論理プログラミング言語の開発, 定理証明器の実装の経緯などが示された。FGCSプロジェクトの重要な成果として,

人材の育成に加え国際的なイニシアチブをとったことが示されたのが印象的であった。次に, その発展として立ち上げられた発想支援追求のためのスキルサイエンスの応用事例として, チェロの演奏技法の一つであるスピッカート奏法を習得する際の「コツ=驚くべき事実」を, アナログカルアブダクションを用いて腑に落ちる説明として形式化できることが示された。講演の最後には, 古川先生のチェロと北陸先端大教授藤波 努氏のピアノによる, Max Bruch の Kol Nidrei(典礼歌)の演奏が行われ, 参加者にはサプライズな演出となった。会場は本格的な演奏会さながらの雰囲気となり, チェロとピアノの心地良い響きに包まれた。

大会最終日の5月15日には, 愛媛大学工学部教授の吉井稔雄氏の招待講演が丸山文宏副会長による司会進行で行われた。「いい加減の交通制御を目指して」と題して, 交通制御に関する技術をわかりやすくお話しいただいた。故 越 正毅東京大学名誉教授が「信号サイクル長と文明の程度は反比例する」と講義で力説されたことをきっかけに交通制御の分野に進まれたエピソードや, 我々にも身近な信号の制御が交差点到達前のドライバーの判断におけるジレンマや不確実性を軽減するように設計されていることが示された。次に, 高速道路への流入を制限することでグリッドロックの発生を抑制し, 迂回先の一般道を含む全体の流量が向上し得ることを示すシミュレーションが紹介された。最後に, 経路案内を容易にする取り組みとして, 「ココ! マーク」と呼ばれる視認性の高いアルファベットの記号化標識について高知県内の交差実用化試験が実施されている様子などが紹介された。機械と人間が適度な役割を担う交通制御の在り方を通じ, 人工知能と社会との関わり的重要性を改めて考える機会になった。本大会最後のイベントにもかかわらず多数の参加があり, 大会の盛り上がり強く印象付けられた。

講演の詳細は以下に掲載の講演スライドを参照されたい。<http://www.ai-gakkai.or.jp/jsai2014/invited-talk>



図1 左から講演中の青野義久氏, 古川康一氏, 吉井稔雄氏